

第 242 回松本歯科大学大学院セミナー

日 時: 2011 年 12 月 2 日(金) 17 時 30 分~18 時 30 分

場 所: 実習館 2 階 総合歯科医学研究所セミナールーム

演 者: 山村 健介 氏

(新潟大学大学院医歯学総合研究科 口腔生理学分野・教授)

タイトル: 口腔からの食物摂取の重要性を脳科学から考える

最近、医療型療養病床の入院患者の4割強が経管栄養を行っているという調査報告があった。このことは、口腔科学に携わる人間として患者の QOL の維持を考えた際に、このことは憂うべきことである。残念なことに「口腔からの食物摂取は重要である」というコンセンサスに基づく議論は、口腔機能に精通し、摂食機能に何らかの障害を抱える人を日常的に観察する経験を持つ者同士でのみ成立するというのが現状である。健康な一般人、あるいは専門分野の異なる医療人と我々の間のギャップを埋めるには、口腔の持つ特異性、全身機能における口腔機能の位置づけを今一度確認した上で、なぜ経管栄養でなく口腔からの栄養摂取が重要なのかを多職種連携の場で説明できることが必要である。

生物学的にみると摂食行動の主たる過程である咀嚼・嚥下は、消化管によって行われる栄養摂取の第一段階にあたる。すなわち、口腔は消化管の入り口であり、消化液を分泌する機能、食物を消化液と混合し、次の段階の消化を行うために移動させる機能は口腔固有の機能ではなく、胃や腸など他の消化管も同様に備えている。しかも、通常我々が摂食に費やす時間は、消化・吸収の全過程からみると、ほんの一部分に過ぎない。それにも関わらず、ひとたび口から食べる機能が失われたり制限されたりした際に、人が非常な喪失感を味わうのはなぜであろうか。

消化・吸収過程における摂食行動の最大の特徴は「摂食行動は栄養摂取の過程では数少ない動物性機能」ということであろう。「のど元過ぎれば熱さを忘れる」ということわざにもあるように、食物を嚥下したあとの消化・吸収の過程は、私たちの意識にのぼることなく自動的に行われる。これに対し、食欲という本能にもとづく基本的欲求に始まり、食物を認知して手に取って口に運び、咀嚼して味わい、嚥下して精神的満足感を得るといった摂食行動には、運動制御、感覚認知、精神活動などの動物性機能の全てがつまっていると言っても過言ではない。すなわち、消化・吸収の全過程のなかでもっとも脳を使っているのが摂食行動であり、これには大脳をはじめとする高位脳の活動が不可欠である。

本セミナーでは、摂食行動と大脳の活動についてのいくつかの事例を紹介し、それらの活動が「食事を楽しむ」「おいしく食べる」こととどのように関わっているのかを考えてみたいと思う。

*Matsumoto Dental University
Graduate School of Oral Medicine*

1780 Gobara, Hirooka, Shiojiri,
Nagano 399-0781, Japan

山村健介 略歴

平成 2 年 3 月 新潟大学歯学部歯学科卒業

平成 6 年 3 月 新潟大学大学院歯学研究科修了(口腔生理学専攻)

平成 7 年 4 月 新潟大学助手 歯学部口腔生理学講座

平成 9 年 8 月 カナダ・トロント大学歯学部 Post Doctoral Fellow (～平成 11 年 8 月)

平成 12 年 12 月 カナダ・トロント大学歯学部 文部科学省在外研究員(短期)
(～平成 13 年 2 月)

平成 18 年 6 月 新潟大学助教授 医歯学系摂食環境制御学講座口腔生理
学分野(～平成 21 年 3 月)

平成 21 年 4 月 新潟大学教授 医歯学系摂食環境制御学講座口腔生理学分野
(現在に至る)

担当:顎口腔機能制御学 増田 裕次